

## 西鶴作品の中の女性像について

### ——《悪女》をめぐる考察——

趙\* 賢 廷

#### はじめに

江戸時代、社会と身分制度の安定のため権力者によって取り入れられた儒教思想は、武士は勿論、町人を中心に庶民階級にまで影響を及ぼした。確かに、江戸時代は仏教・儒教・神道の三思想が共存していた為、庶民階級の中で、儒教的観念がその本質的部分において深く浸透していたとまでは言えないだろう。しかし、日本のこの時代における儒教倫理は、中国や朝鮮のように特定階級に限って学ばれたものではない。寺子屋などを通じて、儒教の礼法ではなくその精神が、町人をはじめとした庶民階級に属する女性にまで学ばれていたのである。よって儒教倫理が庶民として暮らしていた一般女性の日常生活へ影響を与えたことは否定できない。

三従・七去などの儒教倫理を守りながら、一生へ良い娘・へ良妻賢母として生きていくことは、江戸時代の女性にとって理想的な人生であったと思われる。というよりもむしろ、へ良い娘・へ良妻賢母への受益者たる親、夫、ひいては世間一般にとつてこそ、理想的な、かくあるべき女性像であった。ところが、儒教倫理から見ても模範的な女性像を覆すような女性の登場人物を西鶴は数多くの作品の中で描いている。本稿ではへ地女<sup>③</sup>を中心に、『女大学』を参考にしてどのように（儒教倫理に背く女《悪女》が扱われているかを考察する。

#### 一 『女大学』と西鶴

『女大学』を西鶴作品の女性に関する考察にあたって参考にする理由は次のものである。

西鶴の作品の刊行時期から離れるが『女大学』<sup>④</sup>の十九項目は、当時の女性なら守るべき倫理であったと思われる。『女大学』は貝原益軒の『和俗童子訓』・宝永七年（一七一〇）<sup>⑤</sup>巻五の「女子を教ゆる法」に基づいて作られたもので、享保元年（一七一六）大阪の柏原清右衛門と江戸の小川彦九郎の合梓『女大学宝箱』として、江戸中期以後

広く流布し、女子教訓書として出版された。ところが、石川松太郎氏によると、『女大学』<sup>⑦</sup>が出現するまでの近世前期には、中国で編まれた女訓書がただちに移植されて学習されていたようで、中国の『女孝経』、『女論語』、『女戒』、『内訓』を意訳抄録した『女四書』<sup>⑧</sup>などは儒教原理によって、男尊女卑の思想と良妻賢母への教養を啓蒙している。また、江戸前期に公刊された『女今川』と『女実語教』などの女訓を中核として女子の総合生活教科書を編集しようとする試みは女大学類にそのまま引き継がれているとも述べており、『女大学』の出版以前の江戸前期にも『女大学』の内容に類似する儒教的な秩序が女性に求められていたことがわかる。また、『女大学』が近世後期から近代の初頭にかけて女性教育の教科書および教訓書として様々な階級の女性に読まれたことから推測すると『女大学』が日本の儒教と女性に与えた影響は大きいものだったと思われる。

以上に加えて、僧侶の浅井了意が教養として儒教を習得し、浅井了意の『堪忍記』<sup>⑩</sup>などの女訓を含む教訓書が西鶴に影響を及ぼしていること。さらに、江戸時代の仏教が儒教の影響を受けたことを考慮すると仏教の影響を受けていた西鶴が儒教をまったく意識しなかったとは言い難いであろう。したがって、西鶴作品の女性を、『女大学』を通して考察することで、西鶴と儒教的観念との関係性を浮かび上がらせることができるのである。本稿では『女大学』の十九項目の中、以下に列挙するところに注目し、四種類の《悪女》に分けて考察する。

#### ◆女大学<sup>⑫</sup>

四、婦人は夫の家をわが家とする故に、唐土には、嫁いりを「帰る」という。我が家にかえるという事なり。縦夫の家貧賤なりとも夫を怨むべからず。天よりわれにあたえ給える家の貧しきは、我が仕合せの凶しき故なりとおもい、一度嫁いりしては其

〔キーワード〕西鶴／女大学／悪女／儒教／女性像

\*平成一七年度生 国際日本学専攻

の家を出でざるを女の道とすること、古、聖人の訓えなり。若し女の道にそむき、去らるる時は、一生の恥なり。されば婦人に七去とて、悪しきこと七つあり。一には、婢に従わざる女は去るべし。二には、子なき女は去るべし。是れ妻を娶るは子孫相続の爲なれば也。然れ共、婦人の心正しく行儀よくして妬むところなくば、さらずとも同姓の子を養うべし。或は妾に子あらば、妻に子なく共、去るに及ばず。三には、淫乱なればざる。四には、愒氣ふかければ去る。五に、癩病などの悪しき疾有ればざる。六に、多言にて慎みなく、物いい過ごすは、親類とも中悪しくなり、家みだるものなれば去るべし。七には、物を盗む心あるはざる。此の七去は、皆聖人の教えなり。女は一度嫁入りして其の家を出だされては、仮令ふたび富貴なる夫に嫁すとも、女の道にしたがいて、大いなる辱なり。

五、女子は、我が家にありては、わが父母に専ら孝を行なう理なり。されども、夫の家に行きては、専ら婢をわが親よりも重んじて厚く愛しみ敬い、孝行を尽くすべし。親の方を重んじ、舅の方を軽んずることなかれ。

十三、若き時は、夫の親類・友達・下部等の若き男には、打ち解けたる物語りし、近付くべからず。男女の隔てを固くすべし。如何なる用有りと、若き男に文など通わすべからず。

## 二 悪女という対象の意味

江戸時代、悪女は「容貌の醜い女」の意味として使われており、現代で使われている意味とはかなり相違がある。三田村鳶魚氏によると、現代の悪女のイメージに近そうな「毒婦」という言葉さえも江戸時代には殆ど使われていなかった。

悪女は簡単に言えば「悪い女」だと意味づけられるだろう。しかし、どこが、何故悪いのかは、その意味を決める基準が明確ではない。従って、まず、その意味を一般的に使われている辞書から探してみる。

『日本国語大辞典』①容貌の醜い女。醜女、②心の悪い女。性質のよくない女。毒婦、③男を魅了し、墮落させるような小悪魔的な女性。男を手玉にとる女。『広辞苑』①性質の悪い女、②顔かたちの醜い女。と現在の辞書では、第一に容貌の醜い女性の意を採用している。ところで『邦訳日葡辞書』には、「みにくくて見かけの悪い女。また、身持ちの悪い女。」とあって、やはり身持ちの悪い女性のことも触れている。身持ちの悪さの内容こそないが、江戸時代にも現在行われている辞書の「悪女」の意味があった。

本稿では、身持ちの悪い女性を儒教倫理に背く《悪女》に置き換えて考える。なお、先行研究には西島孜哉氏の研究が挙げられるが、西鶴の作品の中の遊女を主に扱っていて、地女に重点を置き儒教倫理から考察したところは、たとえ時代と作品は異なるが関民子氏の研究が先行研究だと言える。他に西鶴と女訓物に関する研究で青山忠一氏と徳田進氏の研究が挙げられるが、その比較基準の女訓物は日本儒教と仏教、中国の『烈女伝』などの中国の儒教的な女訓物で、『女大学』に絞って考察した研究は今までなかった。

## 三 《悪女》の四つの種類

### (1) 恋愛に積極的な《悪女》

『女大学』の十三項目には、女は「若き時は、夫の親類・友達・下部等の若き男には、打ち解けたる物語りし、近付くべからず。男女の隔てを固くすべし。如何なる用有りと、若き男に文など通わすべからず。」と詳しい内容を添えている。つまり、若い女から男への接近は禁じるもので、自由恋愛を戒めている内容だと思われる。ところが、西鶴作品ではこの項目に反する登場人物をよく見つける。それは、五組の男女の愛欲事件をモデルにした作品『好色五人女』にも見える。特に、お夏・お七・おまんは、十六歳の未婚女性であるにもかかわらず、好きになった男性への行動は積極的である。お夏には、花見幕の中へしのび入ろうとする清十郎を招き寄せる積極性が覗かれる。

似たようなケースで、八百屋の一人娘・お七も吉三郎に会うために小僧を買取し、寺の部屋に入り込む。最後吉三郎に会えるという思いだけで、火事を起こし、結局火あぶりの刑を受けることになる。裕福な商人の琉球屋の娘・おまんも、優れた美貌が有名で、源五兵衛に好かれるため、男装をする。また、二人が一緒になって貧しい生活をする中でも、「是を思ふに、戀にやつ身人をもはぢらへず。」と西鶴が評価するほど、生活苦を恥とは思わないようになる。このように、十六歳の美人のお夏・お七・おまんは、若い女でありながら、男に近づき、恋に積極的であり、『女大学』の十三項目の視点から見ると、『悪女』に違いない。ところが、津田左右吉氏は、「西鶴は恋を性的欲求に始終するもので、性的欲求に基づきながらその欲求を超越する恋愛を認めなかつた儒者にとつて、このように儒教を超越する西鶴の思想は追従できないもの」だつたと言っている。

だが、支配者の統治思想が儒教であり、へ實際生活には儒教・仏教・神道の三思想

が一緒に存在していた江戸時代Vだといつても女性から男への求愛はタブーなものであったと見られる。駆け落ちしたお夏と清十郎は捕まえられ、清十郎は牢に監禁される身になる。お夏は室の明神に清十郎の命乞いをする。その夜、お夏の夢に明神が現れて、「その方も親兄次第に男を持た別れの事もなひに、色を好て其身もかゝる迷惑なるぞ。汝、おしまぬ命はながく、命をおしむ清十郎は頓取期ぞ」と、お夏が好きになつた男を選ぶからこのような目に会つて、清十郎の命はないと告げる。このところは、西鶴が作品の中に明神を出現させてお夏の自由恋愛の意志を責め、罪の意識を与えていると思われる。

他に、当時の儒教を意識し、作品の中の登場人物を通じた弁論も見える。『西鶴諸国ばなし』巻四の二「忍び扇の長歌」は、姫君と身分の低い男性の恋の悲劇を語っている話である。三田村鳶魚氏によると、当時の婚姻が、子孫繁昌に意味を持ち、子孫繁昌は、主君には忠義・親には孝行ということに繋がることで、自由結婚は許されないものであった。従つて、勝手に夫婦になつたとしてもそれは密通同然として扱われた。こういうことからみると、武家の姫君が身分の低い男と自由恋愛をすることは、血統を大事にした上流階級から見れば許されなかつたはずである。また、『女大学』の儒教的倫理から見れば、身分の高い姫君が低い階層の男と恋に落ち、駆け落ちしたことは、姫君に《悪女》のレッテルを貼るに充分である。

ところが、当時の社会が女性に貞操の観念を要求し、人としての感情を認めなかつたことを姫の台詞の中で西鶴自身も暗々裏に認めていることが分かり、西鶴が儒教倫理を全く意識することなく超越したわけではないと思われる。

さて、『浮世栄花一代男』巻三の三「風聞の娘見立男」は、儒教的な倫理を投げ出す女性の男選びの話を描いている。

九州の金持ちの一人娘は十六歳の美人だが夫をまだもつていなかった。そうしている間、娘の父親が亡くなり、娘は一生男を持たず出家すると言い出した。娘の出家のことに母親は悲しんだ。一方で娘は田舎の暮らしは嫌いだから、大阪へ上京し気に入りの男を手に入れ、思う存分栄花を極めたいという。そして、二人の親子は五千両の金を船に積んで上京し、男選びを始める。神から与えられた力で恋の覗き見しか出来ない忍之介は娘に近づいてくる男の欠点を娘に言い妨害をする。

鼻に相違の男と書付て見せければ娘物おもふ顔にて。そこそそのしみの才一よ吟味するまでもなし。何とぞ不足のなき男をせんさくして頼むとあれば。

娘に合わせる予定の男が小便を出すことをみた忍之介が、その男の鼻は大きいが性器は小さいと娘に知らせる。すると娘は、性器こそ楽しみみの第一だから、不足のない他の男を連れてくることを頼むという場面である。

結局、娘に自分をいい男だと偽り、契りを交わすようになった忍之介は「いかな／＼しんなし筆のごとく恥をかくより外はなくて。栄花も是まてと口惜。女の堪忍せぬもことほりせめて。釣夜着の下より踏出されて」と、娘を性的に満足させられず釣夜着の中から蹴飛ばされるようになる。自ら男を選び、性的な面を優先する娘は、儒教倫理からみれば《悪女》だといえよう。しかしその行動があまりにも積極的なもので笑いまで誘うこの話は、『好色五人女』のお夏・お七・おまんと、『西鶴諸国ばなし』巻四の二「忍び扇の長歌」の姫君の欲望を代弁して素直に言い表したものであろう。

## (2) 離婚を要求する《悪女》

『女大学』の四番目の項目、「天よりわれにあたえ給える家の貧しきは、我が仕合せの凶しき故なりとおもひ、一度嫁入りしては其の家を出でざるを女の道とすること、古、聖人の訓えなり。若し女の道にそむき、去らるる時は、一生の恥なり。」と、天から与えられた貧しさを自分の幸せだと思ひ、一度嫁入りした以上その家から出て行かないことを女の道理とすることだと言っている。また、昔の聖人の教えでは、もし、女がその道理を背き、夫の家から出ていく事、つまり、離婚する事は、一生の恥になると言い、女性の離婚が羞恥的なこととして意味付けされている。

ところが、西鶴の作品には、離婚を人生の恥だと思ふどころか、夫に離婚を要求する女性が登場している。石井良助氏によると、江戸時代は、離婚の権利が夫にあり、妻にはなかつた。それに、三行半という離婚状をもらえないと妻は再婚が許されなかつた。即ち、夫の許可と離婚状もなしで、夫と別れようとする女性には厳しい罰が与えられていた。

『新可笑記』巻三の四「中にぶらりと俄年寄」は、離婚状なしで再婚した女に対する当時の状況がよくわかる話である。石垣の上の高堀を繕った事が原因で、病人になつた夫を見捨てて家出した妻が、夫が死んで三十五日も経たないのに再婚したので、亡くなつた夫の親が奉行所へ訴え出るという話である。ここで妻は、離婚状もなく、仲人も立てずに再婚したことが明らかにになり、妻は尼に、再婚の男は遠国へ追放、妻側の親は所払いという罰が与えられた。この類の話は『好色一代男』巻四の一と二「因果の関守」「形見の水ぐし」にもある。強盗詮議のため牢屋に入られた一代男はそこで、

夫を嫌い家出したといつて捕まえられた人妻と出会い、愛する仲になる。ところが將軍家の御法度で牢払いされ、一代男が、女を置いて食べ物を見つげに行つた際に、その女の兄弟が追いかけてきて女を撃ち殺すという内容である。ところが、夫側に離婚の権利があつたのに対して、夫の側から離婚を求める時には妻が嫁に来た時もらった持参金を返さなければならなかつた。

中田薫氏<sup>23)</sup>によると、「夫が妻を離縁するときは、これを返還するものとす。——中間省略——但しその離縁が妻の申出にかかるときは、これを返還することを要せず。『正保録』卷十九、元禄十五年八月二十三日町触に「養子並妻持参金出入、父方より養子相返候敷、夫之方より妻に暇とらせ候はゞ、持参金相可申候、養子又は、妻女房より暇取候はゞ、持参金は相対次第可任由可申候事とあるにて知るべし」と実例を挙げている。つまり、夫から離縁を要求されるケースのほうが、離縁状が取得可能で、再婚もでき、持参金も返してもらえらる確率が高く女性の方には有利である。『西鶴織留』卷二の二「五日帰りにおふくろの異見」にはこれを利用して、娘に夫に飽かされて離縁される方法を教えている母親が登場する。

当時の儒教倫理に従うと、女は一生一人の夫に従うことであるが、この母親は、女として守るべき倫理より娘の将来を考え、上手く離縁される方法を教えているに違いないだろう。この部分は、西鶴が「親の身として、世帯を大事にかけよといふべき物を、男悪みして戻れと、悪事をいひふくめけるは、よく／＼智のしかたのよろしからざる故也。」といい、家庭を大事にすることを教えるべき母親が、娘に離縁されるやり方を教えることは、その婿の仕打ちがよくないからだといつて、母親の子供の実利を求め行動を弁護しているところである。

『万の文反古』卷二の三「京にも思ふやうなる事なし」にも離縁されるためいろいろな手段をつくす女の姿が目立つ。二十三回も結婚と離縁を繰り返して落ちぶれた男の話で、この男に嫁に来た寺町の白粉屋の娘の家財道具を壊す行動が夫に三行半を書かせる。このように当時、夫に離婚権があつたとしても、妻にも夫に嫌われて離婚が出ることを示している。『西鶴織留』卷四の一「家主殿の鼻柱」は、妻が離婚をわざと誘導する行動はしてないが、繰り返された引越して経済的に困難に落ちた時、妻から将来性のない夫に直接、離婚を要求する話だといえよう。

儒教的な視点から見れば、(貞女は両夫にまみえず)のように、女は一生一人の男に従事するべきで、離婚したり再婚したりすることが望ましくないこととして認識されたのである。こういうことからみると、『好色一代男』の一代男と駆け落ちした女と、『西

鶴織留』の娘に離縁される方法を教える母親、三行半を夫に要求する扇屋の女房、『万の文反古』の離縁されるため家財道具の破壊と無駄遣いで家計を危なくする白粉屋の娘は、『悪女』に違いないだろう。しかし、一生仕えるべき夫が、妻の心になわず一生添遂げられない人と分かつた場合の『悪女』のような妻たちの行動は、儒教的倫理より実利を選ぶようになったことを見せている。

### (3) 親に背く《悪女》

『女大学』の五番目の項目には、「女子は、我が家にありては、わが父母に専ら孝を行なう理なり。」と書いてある。しかし西鶴の作品では親に背く《悪女》と親に従つて自分を犠牲にした親孝行娘を見ることが出来る。『本朝二十不孝』卷三の一「娘盛の散桜」は「今ならば手術で簡単にすむ子宮外妊娠のやうな異常受胎や体質」<sup>24)</sup>による一家の不孝を描いた作品である。

両親の強い勧めで、四人の娘、お春・お夏・お秋・お冬は、結婚するが、全員出産直前に亡くなるという悲劇が続く。その中で娘・お冬は結婚を拒んで出家をしようとするが「さもあれば親の不孝の第一なり」と親類に反対され、結果的には両親の意思に背かず結婚して犠牲になった代表的なケースだといえる。「娘盛の散桜」の両親は、四番目の娘・お冬の死をきっかけに、「よしなき男をもたせ帰らぬことを悔ぬ」と後悔し、五番目の娘・乙女に「そなたは髪を下ろし姉共が命日を問なば」と異常妊娠によって死亡した姉たちの冥福を祈るため、出家することを勧める。

ところが、乙女は、「たまたま人間に生を受けて。男と云物もたては口をしかりき。」といながら家を出てしまう。それに自ら山賊の男を夫に定める。また乙女は山賊の夫を連れて実家の物を盗んで逃げる途中、誤って淵に落ち、夫と共に人前で恥をさらしながら死ぬ。乙女の行動は、親の言うことを聞かないという不孝な点で『悪女』の烙印を押されるのに充分であるが故に密通としても扱われる。自ら男をもつたことから『悪女』となるのである。ところが、このような乙女の行動を、箕輪吉次氏は「大悪とはいいい難いもの」<sup>25)</sup>だと言いながら、「姉四人の呪われた死から解き離れるための行動」であつたと説いている。また、乙女の悪女のような行動は、「四人の娘を次々と死に追い込んだ彦六夫婦への報いの要素を持つている」と指摘している。親がそのように娘たちの結婚を急がせ、死に至る結果になった原因はどこにあるのか。当時の社会で、結婚しないまま生きていくのは大変なことであつた。女性は嫁にいつて男性に養われ、(家の存続の道具になること)が当たり前のことだつたらう。

これを西鶴は『西鶴諸国ばなし』巻五の六「身を捨て油壺」のはじめに、「ひとりすぎ程世にかなしき物はなし」と言っている。女主人公は若い時は評判の美人であったが、十一人の夫と次々と死別し八十八歳になる。さすがに、この年になると生計がたてられないので、油盗みをして生きるが、盗み先の神主らに殺される。

さても長生はつれなし・以前の姿に引き替え・かしらに霜をいただき・見るもおそろしげなれども・死れぬ命なれば。

この話は若い時相当な美人だと言っても夫なしで八十八歳になった女性の醜い姿を表現している。「娘盛の散桜」とこの話から類推すると女性が結婚できずに年をとって生計が立てられなくなることを五人姉妹の親は心配していたらう。そして嫁に行かせた娘が懐胎した時も、親は「日を箒月を繰産れぬ先乳嬢を定め鶴亀のつきし小袖を拵へ夜更けて松吹風の戸に音信をも其事かと母の親目もあはず気遣ひせしに」、「常子安の地藏に折り腹帯の明神に宿願かけ」をしながら健康な子供を産めるように努力するのである。

次の『本朝二十不孝』巻一の三「跡の剥けたる嫁入長持」の小鶴の親も娘の将来が心配で何回もお嫁にいかせたのだと考えられる。加賀の城下の絹問屋左近右衛門は評判の美人の娘のために、千軒も聞きくらべ見定めして、豪華な嫁入り道具を揃えて嫁に行かせる。しかし、娘の小鶴はそのたびに理由を作り、家出をして二十五歳まで十八箇所から離縁される。結局親は悔み死をし、弟までも姉の悪い評判のせいで嫁をもらえずに思いつめながら過ごしているうち二十三歳で世を去る。一人残された小鶴は下男を夫にして、夫は犬殺し、小鶴は髪のお売りしながら世渡りしようとする。ところが悪い噂がすぐに広まっていて誰も買ってはくれず、悲惨な姿で死んでしまう。

総じて女の一生に男といふ者もの独りの事なるに。其身持あしくさられて。後夫を求むるなどすゑの女の事なり。人たる人の息女はたしなむべき第一なり。縁結びて二たび歸るは女の不孝是より外なし。もし又夫縁なくて死後には此丘尼になるべき本意なるに。

このところは儒教倫理の三従を示し、『女大学』の四番目の内容にも当てはまる。また、西鶴が一人の男に一生添えられなかった小鶴の行動を評価する部分だと思われる

が、当時の政治思想が儒教だということを西鶴が念頭に置いて表面的に述べたことではないだろうか。

天正十三年ポルトガル出身の宣教師、ルイス・フロイスにまとめられた『日欧文化比較』によると、日本女性の離縁がしばしばあるという文章が何箇所視られる。つまり、当時日本女性の結婚と離縁は普通のことだったというのを示している。この点を考慮すると、西鶴が親に背いて何回も離縁と結婚を繰り返す小鶴を批判するのに現実性と必然性はなかったと思われる。逆に西鶴の作品を読む側が儒教倫理を大事にする階級の場合を意識してわざと儒教倫理的な内容を添えたのではないだろうか。

物語の最後に来る「今時の世上勝手づくなればとて心のさもしき事よ。」という文章は、暮らしのためだとはいえ再婚を急ぐのはさもしきことだという意味で、作品の中では（嘘で固めた仲人屋）が言っているというが、仲人屋の口を借りた西鶴の（本当の意見）だといえよう。乙女と小鶴は『女大学』と儒教倫理の内容通りだと『悪女』に違いないが、親孝行と世間の目を意識するより自分の欲望に忠実なところは共通点で、西鶴はこのところを三従的な内容を対照しながら（乙女と小鶴が『悪女』にならざるをえなかった現実）を強調したのではないだろうか。

#### （4）懺悔しないといけない『悪女』

『女大学』の四項目の中には嫁に行かない女と、七去の子供の産めない女は去るべきという内容がある。西鶴の作品にはこの二つの項目に当てはまる『悪女』を見出すことができる。『好色一代女』の主人公、一代女は名前通り、一生を好色のために生きた女性である。

ところが、九十五六程の水子の幻想が一代女を悩ましても五百の羅漢の中で、昔愛した男たちの面影をみつけて涙の懺悔をする。この部分は、当時の女性の儒教倫理を意識した西鶴が一代女の水子への罪の意識の苦悩を強調するための西鶴の（仕掛け）かもしれない。

この部分を白倉一由氏は、体に痕跡が残る女性の性と仮名草子にまで貫流してきた懺悔・回想の構想という特徴で説明しているが、一代女の子墮しへの罪意識と好色人生への懺悔は、『浮世栄花一代男』の終りのところに登場する尼からも見ることができるといえる。高橋俊夫氏が、「一代女の再来」と言及しているこの尼は、性交で、女装をした若い男性の腰を抜かせ、血を吐かせるくらいに多淫な女性である。尼は墮胎の薬を求め

るため老尼に尋ねる。そうしたら尼は老尼に、子供は老後の楽しみで、子供を持たない者の行く末がどんなに寂しいかと言われ、なぜ産まないのかと聞かれる。すると、尼は、子供を産む嬉しさは分かるが、世の中の哀れを知っており、父親も知らない子供を十一人も生み、全員養子に出したと答える。

この部分は、子供を持たない女性についての世の中の認識を、老尼を通じて表しており、子供の持たない悲しみと罪の意識を「世の哀をしるぞかしとつとつとに語り給ふ」という言葉で表している。子供が老後の楽しみで、子供のない者の末路は悲しいという考えは、『女大学』の四番目の項目にある「子なき女は去るべし」という儒教倫理に通ずるものだと思う。結局、終わりのない性欲に悩んだ尼は懺悔し、「けふより男にあはじ」と決心した後、男狂いを止める。

篠原進氏は、「『好色一代女』と小町伝説とが無縁ではない」ということを前提にして、『小町草紙』の在原業平と小野小町の会話を挙げる。

業平仰せけるはさらぬだに、女は罪深くして、業障の雲あつく、真如の月も晴れやらす。<sup>(3)</sup>

女は「罪深いもので悪業を犯しても正道をさまたげる雲も厚く、煩惱が解けて本体の現われる月もよく晴れず」ということで、一代女が一代男と違って、「差別的」に懺悔をしなければならなかったのは、女としての生まれながらの「罪」と「悪業」に原因があったと思われる。この「罪」と「悪業」は、中世の仏教思想と関係があると思われるが、一代女が生きた、男尊女卑の江戸時代という要素も考慮すると、西鶴の一代女への「差別」は止むを得ないことであつたであろう。一代女と『浮世栄花一代男』の尼は、一夫に付き添えずに自由に恋愛をした子無き女という所が共通点で、これで『悪女』だと見える。

## 結論

以上、本稿では、儒教的な女訓書『女大学』に逆らう女性を《悪女》に定義し、西鶴の作品の中で考察を試みた。自由恋愛をする女、離婚を求める妻、親不孝な娘、子供より好色な生き方を優先した母という四事例に分類した。その結果、西鶴作品には《悪女》と見られる女性が多く扱われていて《貞女》の話は圧倒的に少ないことに気付い

た。更に、作品中、登場人物に敢えて『女大学』に類似する儒教規範から逸脱した行動をさせた上で、西鶴自らが《悪女》たらしめた彼女達の立場を代弁しているとしたか思えない台詞を書き記していることを考え併せると、次の推論を導くことができるのではないだろうか。すなわち、西鶴は確かに《悪女》にまつわる面白可笑しい話を通して、まずは読者を面白がらせたかったに違いない。

しかし、では何故に《悪女》を主人公にすることが、読者の眉をひそませることなく、興味を引き付ける物語として人気を得たのであろうか。それは当時の読者にとって、儒教倫理規範に逆らう《悪女》の行動が、まさに儒教倫理規範から逸脱しているが故に痛快に感じられたからに他ならない。堅苦しい儒教倫理に対する反感が一般庶民にはあつたのではなからうか。結果として、西鶴が儒教倫理への批判的視座までを有していた、という結論を論証するにはまだ困難である。ただし、儒教は、西鶴が生きた江戸時代の町人をはじめとした庶民階級の、女性までもが生きる上での規範とした倫理である。そして、西鶴の最も上得意たる読者はこれら一般庶民であつた。とするならば、西鶴が自らの読者を楽しませるために、楽しませる手段、道具として儒教倫理を用いたとしても何なら不思議ではない。少なくとも、当時の流行作家たる西鶴が物語を執筆する時に儒教的倫理を意識した上で作品を構築したことは確実であると考ええる。

## 註

- (1) 尾藤正英「日本文化論」放送大学教育振興会・一九九三
- (2) 三従↓女性は、生家では父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うということ。仏教や儒教による教え。七去↓妻を離縁してよいとされた七つの理由。父母に従順でないこと、淫乱なこと、嫉妬すること、悪病のあること、子のないこと、おしゃべりなこと、盗みをする事。
- (3) 地女↓遊女ではない女。
- (4) 『女大学』女子の教訓書。一卷。貝原益軒作とされるが、著者・成立年代とも未詳。一九条からなり、封建社会における女性観が著されている。江戸中期以後広く流布した。
- (5) 貝原益軒(一六三〇—一七一四)江戸前期の儒学者・本草家・教育思想家。筑前生まれ。名は篤信。初め損軒と号した。福岡藩儒。朱陸兼学から朱子学に帰し、本草などにも目を向け、博物学的実証

主義に立つて窮理の道を重視。著「大疑録」「大和本草」、医書の「養生訓」、子女の教育を説いた「和俗童子訓」など多数。

(6) 『和俗童子訓』江戸中期の児童教育書。五巻。貝原益軒著。宝永七年成立刊。児童教育の本質、児童の成長段階に即した教育法を説き、特に読書法・手習法にふれ、女子教育論(後人により改修、「女大学」の名によって普及した)を添える。日本最初のまとまった教育論で、「益軒十訓」の一つに編入された。

(7) 石川松太郎編『女大学集』平凡社・一九七七

(8) 中国、清の康熙年間に王相が編纂した女子のための教訓書。四巻。「女誠」「女論語」「内訓」に、自分の母、劉氏著「女範」を加えて註をつけたもの。江戸末期に西坂天錫が和訳。

(9) 『女今川』絵入り、仮名書きの往来物。一巻。沢田きち著。元禄十三年(一七〇〇)刊本が古く、その後各種の版がある。今川了俊の「今川帖」に擬して書かれたもので、江戸時代中期以後女性の習字手本、教訓書として広く普及した。

(10) 小川武彦『「堪忍記」の典故上の二——中国種の説話を中心に——』(『近世文芸研究と評論』一三三号)・一九七七

(11) 尾藤正英『日本文化論』放送大学教育振興会・一九九三

(12) 石川松太郎編『女大学集』平凡社・一九七七、貝原益軒『家訓』、『益軒全集』三巻・益軒全集刊行部・一九一一

(13) 大久保忠国・木下和子編『江戸語辞典』東京堂出版・一九九一

(14) 三田村鳶魚(三田村鳶魚全集) 十四巻) 中央公論社・一九九七五・四・一九八三・十

(15) 西島孜哉『近世文学の女性像』世界思想社・一九八五

(16) 関民子『江戸後期の女性たち』亜紀書房・一九八〇。関民子氏は儒教倫理に背く女性を「悪女」とした。

(17) 青山忠一『二松学舎大学東洋学研究所集刊』の所収論文「西鶴に見る女訓的傾向について」二松学舎大学東洋学研究所・一九八三、徳田進『孝子説話集の研究』近世編』井上書房・一九六三

(18) 『好色五人女』(『日本古典文学大系』第四七巻) 岩波書店・一九五七

(19) 津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究(六)』岩波文庫本・一九七八

(20) 三田村鳶魚(三田村鳶魚全集) 第十一巻) 中央公論社・一九九七五・四・一九八三・十

(21) 『浮世栄花一代男』(『定本西鶴全集』第十四巻) 中央公論社・一九五三

(22) 石井良助『日本婚姻法史』・一九七七

(23) 中田薫『徳川時代の文学に見えたる私法』岩波文庫・一九八四

(24) 『西鶴織留』(『日本古典文学大系』第四八) 岩波書店・一九五五

(25) 暉峻康隆『西鶴』評論と研究上』中央公論社・一九四八

(26) 『本朝二十不孝』(『定本西鶴全集』第三巻) 中央公論社・一九七三

(27) 箕輪吉次『本朝二十不孝』「娘盛の散桜」考―春夏秋冬と五行説―学苑・一九八五

(28) 『西鶴諸国ばなし』(『定本西鶴全集』第三巻) 中央公論社・一九七三

(29) ルイス・フロイス著、岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波文庫・一九九一

(30) 白倉一由(『好色一代女』)女性立場から描く『国文学解釈と鑑賞』一九九三・三

(31) 高橋俊夫『西鶴文学考』大空社・一九九六

(32) 篠原進『弘学大語文』の所収論文『好色一代女』と小町伝説』弘前学院大学国語国文学会・一九八五

(33) 『御伽草子』(『日本古典文学大系』第三十八巻) 岩波書店・一九八一

(二〇〇八年一月二日)

# About the Images of Girls in Saikaku's Works :

## Consideration of Bad Girls

CHO Hyunjeong

### abstract

In the past many people have researched about bad women whom they considered as Fatal Women who ruin men. In my report, I defined these women as ones who betrayed Confucianism in *Onnadaigaku*. I tried to research and compare many women in Saikaku's works. Three thoughts (Shintoism, Buddhism, and Confucianism) coexisted in the Edo period, but Confucianism was the ruling thought. Women were to be good daughters, good wives, and wise mothers. While thinking about this philosophy, I also researched about ordinary women in Saikaku's works. I found that unfaithful women outnumber faithful women in his works. He commonly wrote about women who demanded divorces, girls who enjoyed free love and women who refused to get pregnant. In the past, it was said that Saikaku wasn't aware of Confucianism, and he simply rose above it. But after much consideration, I realized that his writing demonstrated his knowledge of the Confucian idea that was prevalent during that time. Confucianism is obviously one of the key elements which influenced his works.

Keywords : Saikaku, *Onnadaigaku*, bad girls, Confucianism, the images of girls